

アルゼンチン経済危機と IMF カレンシーボード制の功罪

日本福祉大学 毛利良一

< 報告要旨 >

新自由主義路線による経済改革と「カレンシーボード」制の採用によって、アルゼンチンは、1990年代には、インフレの収束と物価の安定および高度経済成長を謳歌する「ラテンアメリカの優等生」となり、テキラ危機、アジア危機の伝染も最小限の影響で食い止めた。しかしアジア危機後の交易条件の悪化、とりわけアルゼンチン輸出主力国際市況商品の価格下落、99年1月のブラジル・レアルの切下げと米ドルの高騰、国際資本移動の流入停止から流出への変化、金利スプレッドの拡大、2001年に始まるアメリカおよび世界経済の景気後退のなかで、アルゼンチン危機は深刻な局面を迎えた。

1999年からは4年連続マイナス成長となり、経済競争力の低下、財政赤字の拡大、金融システム脆弱性の表面化のなかで、2001年末には対外債務不履行、銀行預金の凍結に追い込まれた。首都は街頭抗議行動や騒乱・略奪で荒れ、アルゼンチンの経済・社会・政治危機は深刻化した。2002年初頭、アルゼンチンは兌換制とカレンシーボードを廃止し、フロート制に移行、ペソは3分の1以下に減価した。またドル建て預金・貸付の非対称的なペソ化が行われ、多くの企業や銀行が為替差損をこうむった。不況とインフレの同時進行が再来し、失業率は22%と過去最悪を記録した。壮大な実験は終わったのである。

報告では、以下の点に注目しながら、アルゼンチン経済危機の原因と展開を考察する。

1991年に制定された「兌換法」とそれにもとづく「カレンシーボード」は、どのような仕組みで動いたか。2002年1月に放棄されるまでに演じた功罪は何か。

アルゼンチンの経常収支赤字の背景に何があるか、そのファイナンス、債務危機管理はどのように行われたか。

IMFがアルゼンチン危機の根本要因とする財政赤字の原因は何か。

健全性規制を強化し、1998年にはエマージング市場第2位と評価された銀行システムが、銀行預金凍結という事態に追い込まれたのはどのようにしてか。

IMFの対アルゼンチン金融支援は長期にわたり継続的である。カレンシーボード導入当初に懐疑的見解を表明していたIMFは、やがてアルゼンチン賛美に変わり、危機深化とともに支援に慎重となった。IMFの金融支援策をどのように評価すべきか。